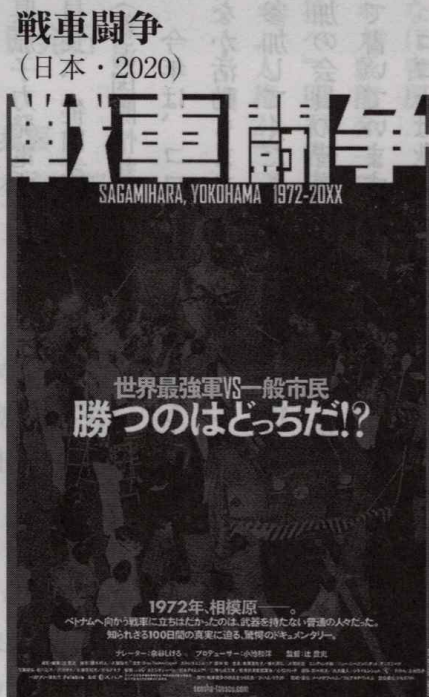


新潟の実家で一人暮らしをしていた母親を昨年一月に相模原市の高齢者施設に転居させた。JR横浜線の相模原駅南口から東方向に延びるさんはぜ通りを歩いて一〇分ほどのところである。駅の北口には広大な米国陸軍相模総合補給廠が見える。さんはぜ通りをさらに進むと西門通りという大通りにぶつかる。この西門とは相模総合補給廠のメインゲートの通称である。



一九七二年八月から九月にかけて、西門通りには西門からの戦車搬出に抗議する人びとが続々と集まった。ベトナム戦争で破損した米軍と南ベトナム軍の戦車は横浜ノースドックまで船で運ばれ、そこからトレーラーに載せられ相模総合補給廠へと陸送された。ここで修理されて再び戦場に投入されることになる。本作品は搬出阻止闘争に参加した人びとの証言や研究者

の解説に当時の映像を重ねて、日本はベトナム戦争に「参戦」していた事実を暴き出す。横浜ノースドック手前に村雨橋という橋がある。戦車を積載したトレーラーはこの橋を渡っていた。村雨橋については、一定重量・幅以上の車両の通行を禁じる車両制限令によって、二〇トン以上の車両が通行するには許可を必要とした。ところが、戦車トレーラーはこの制限重量を大きく超えていたにもかかわらず、車両制限令に違反して無許可で通行していたのだ。この事実判明が闘争に「法的根拠」を与えた。西門通りには社会党、共産党、新左翼各セクト、ベ平連や「ただの市民が戦車を止める」会などの市民団体、労働団体などがテントを構えて、テント村が形成された。

革マル派が一番いい場所をとった。当時の参加者が「あいづらは目立つことしか考えていなかった」と批判する。機動隊に追われた学生が共産党のテントに逃げ込むと、「暴力学生！」と罵られ追い返された。代々木の指示でしか動かない共産党はひどかったと目撃者は憤る。いずれにせよ、西門前を人びとが占拠することで戦車は止められたのである。

日本政府は九月一二日に「ベトナム向けの搬

出はしない」などの方針を示して、相模原市と横浜市は戦車トレーラーの通行を許可した。九月一八日夜から早朝にかけて機動隊による数千人の占拠者の排除が行われた。ジュラルミン盾で占拠者の頭をたたき割る機動隊の暴行が語られる。こうして戦車の搬出が再開された。その後、一〇月一七日に政府は「車両制限令は米軍と自衛隊の車両には不適用」とする閣議決定を行うのだ。在日米軍の活動は治外法権とする日本は法治国家とはいえない。

闘争礼讃ばかりの映画ではない。占拠者は近隣住民に多大な迷惑をかけたことも証言からわかる。機動隊員の言い分や戦車輸送を請け負った運輸会社の経営者の苦悩も紹介される。また、補給廠では三五〇〇人も日本人が修理作業に従事していた。その経験者が、搬入されてきた戦車に人肉が絡みついていたと明かすシーンには心が凍った。

研究者として何度も登場する栗田尚弥・國學院大學講師は私の大学院生時代の大先輩。ラストで「こんなカネにならねえこと研究して」と苦笑する。栗田著『キャンブ座間と相模総合補給廠』(有隣新書、二〇二〇)を買ってください！(二〇二〇年二月二十五日・ポレポレ東中野) (にしかわ・しんいち/明治大学教授)